



TITLE:

<大會抄録>東晉の貴族性について

AUTHOR(S):

川勝, 義雄

CITATION:

川勝, 義雄. <大會抄録>東晉の貴族性について. 東洋史研究 1977, 36(3): 489-489

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153660>

RIGHT:

東晉の貴族制について

川 勝 義 雄

私はかつて「孫吳政權の崩壊から江南貴族制へ」と題する論文（東方學報四四・一九七三年）で、「北來貴族群のリードする江南貴族制は、きわめて先進的な郷論主義的イデオロギーと、自立農民がまだ弱く、したがって共同體冀求力もまた弱く、大土地所有が作られやすい後進的な、いうならば古代的遺制の残った基層社會との、過渡的な接合の上に成り立った。……江南において自立農民が

廣汎に成熟し、それをふまえた江南の土着豪族層が、上に乗っかる支配貴族層を脅やかしはじめるほどの實力を蓄えるためには、なお東晉一代、すなわち四世紀一ぱいを必要とした」という見通しをのべたことがある。華北から亡命してきた貴族たちが、社會的經濟的な實力においてはるかにまさる江南土着豪族群の上に乗っかることができたのは、まず第一段階としては、その政治的文化的能力によるというほかないが、もちろんそれだけに頼りつつけたわけではなく、第二段階として自己の武力的基盤を固め、さらに江南の新しい土地を自己の莊園と化して經濟的基盤を形成しようと試みた。この第二段階の基盤形成について、もう少し具體的に考えてみたい。